

Title	夢と経験機械と幸福
Sub Title	
Author	成田, 和信(Narita, Kazunobu)
Publisher	慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集編集委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集 (2007.) ,p.613- 623
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40001001-00000001-0613

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

夢と経験機械と幸福

成 田 和 信

私は毎晩のように夢をみる。夢の中に現れる物事は、現実世界にはありえない形や規模をそなえていたり、現実世界とはまったく異なる振舞いをしたりする。夢の中に登場する人々は、いつのまにか他の人物に変身し、誰であるのか見分けがつきにくいときもある。このように奇妙な面はあるが、私が夢の中でさまざまな経験をし、その経験の中で、喜び、悲しみ、怒り、恐れ、憎み、欲し、決意し、考え、悩み、迷うのは確かである。だから夢は、覚めているときの人生とは別の、もうひとつの人生を与えてくれるようにも思う¹⁾。

現実の人生と夢の人生（生まれてから死ぬまで目覚めることなく夢を見続ける人生）のどちらかを選べと言われたら、あるいは、どちらの人生の方が私にとって良い人生かと問われたら、私はおそらく「現実の人生」と答えるであろう。夢の人生はたしかに魅力的なところもある。そこでは、現実世界にはないような澄んだ音を聴くこともできるし、鮮やかな色を見ることもできる。また、現実世界ではもてないような能力をもったり、この上なく穏やかで満たされた気分になったりすることもある。しかし一方で、夢の中で感じる恐怖や悲しみや苦しみは、現実世界では経験したことがないほど激しいこともあり、さらに、夢の中で経験することがらは、しばしば統一的な脈絡なしに展開していくので、その中で生涯を送ることは耐えがたい気もする。

では、夢からこのような欠点を取り除いたらどうであろうか。だれかが、あるいは、何かが、激しい恐怖や悲しみや苦しみのない、そして、周りの物事が脈絡をそなえながら統一的に、それも自分の望むように展開する、そういった夢を私に与えてくれるとすれば、どうであろうか。その夢の中で生涯を送ることを私は選ぶであろうか。あるいは、そのような人生は私にとって良い人生なのであろうか。こうなると答えるのが難しくなる。この紙面を借りて、この問いにどのように答えたらよいか、少し考えてみたい。そうすることで、自分の人生（あるいは、人の人生）にとって何が大切なのか、ということが多少は見えてくるかもしれない。

1. 経験機械

20世紀のアメリカの哲学者ロバート・ノージック Robert Nozick は、現実とまったく見分けがつかないほどリアルな「夢」を与えてくれる想像上の機械を考案し、それを「経験機械 an experience machine」と名づけた (Nozick 1974: 42-43)。私はその機械につながれるとしよう。するとまず、私の脳だけが取り出され、溶液の入ったタンクの中に浸けられる。つぎに、その脳はコンピュータとコードでつながれ、コンピュータから脳に電気信号が送りこまれる。そのけっか、(脳だけになった) 私は、さまざまな経験をする。たとえば、山間の静かな温泉で寛いだり、南の島の海辺で泳いだり、あるいは、素晴らしい小説を書いたり、という経験をする。しかし実際には、私は温泉にも行かず、南の島にも行かず、小説も書かず、脳だけという(哀れな)姿になって、溶液の中に浸されているだけなのである。

経験機械が与えてくれる「経験」は、心の状態のことである。たとえば、私が実際に温泉に浸っている場合と、経験機械が与えてくれる世界(以後、「経験機械が与えてくれる世界」を略して「経験機械の世界」と記すことにする)の中でまったく同じように温泉に浸っている場合を考えると、私は両方の場合とも、同じ「経験」をしている。実際に温泉に浸っている場合、私はお湯の温もりや感触を感じ、開放感を味わい、「自分は今温泉に浸っている」という認識をもつ。経験機械の世界で温泉に浸っている場合も、私はまったく同じような感覚や認識をもつ。すなわち、私はまったく同じように、お湯の温もりや感触を感じ、開放感を味わい、「自分は今温泉に浸っている」という認識をもつ。その意味で、どちらの場合においても、私は同じ「経験」をしている。そして、これらの感覚や認識はすべて、私の心の中で生じている。だから、両方の場合において、私の心の状態はまったく同じなのである。(もちろん、経験機械につながれている私が、自分が経験機械につながれていることを知っている場合には、このようには言えない。だが、しばらくは、「経験機械につながれている人は、その事実を知らない」ということを前提にして話しを進めよう。)

さて、経験機械につながれることによって、望みどおりの人生が経験できるとしよう。すなわち、経験機械の世界の中に入れば、望みどおりの人生を送ることができるとしよう。(しばらくは、経験機械の世界の中で生涯を送るケース、すなわち、生まれてから死ぬまで経験機械につながれているケースを念頭において話を進めていく。人生のなかばで経験機械につながれ、現実世界から経験機械の世界に移動するケースは、あとで考えることにする。) そうだとして、我われは、現実世界での生涯よりも、経験機械の世界での生涯を選ぶであろうか。あるいは、現実世界で生涯を送るよりも、経験機械の世界で生涯を送る方が、自分にとって良い人生だと考えるであろうか。おそらく多くの人は、そうは考えないであろう。しかし、それはどうしてなのであろうか。その理由として、

とりあえず次の二つのことが思いつく²⁾。

(1) 経験機械の世界は、実在ではなく幻影である。

(2) 経験機械の世界では、他者との接触がなく、孤独である。

しょせん経験機械の世界は幻であり夢である。そこで経験されたことは実際には生じていない。たとえば、その世界で私がすばらしい絵画を描いても、その絵画は実際には存在しない幻にすぎない。たしかに、その絵画を描くという経験をすることはできるが、その経験に対応する事実は実在しない。あるいは、その世界で私がすぐれた政治家になって社会改革を成し遂げたとしても、社会改革を成し遂げるという経験をすることはできるが、現実の社会は改革されない。このような幻の世界で一生を送ることは、あまりにも空しい。これが、(1) で言っていることである。

さらに、経験機械につながれると、他者との接触や交流をまったく断たれてしまう。たしかに、他者と会ったり話したりするという経験をすることはできるが、脳だけになって溶液の中に浸されている私は、実際には、他者と会ったり話したりすることはできない。その意味で、経験世界の中で生きることはひどく孤独である。このような孤独な人生は耐えがたい。これが(2)で言っていることである。

人々が「経験機械の世界で送る生涯は自分にとって良い生涯ではない」と考えるとすれば、その理由として、とりあえず(1)と(2)が思いつく。しかし、(1)や(2)は、本当に正しいのであろうか。

2. 実在性

現実世界において、目の前に机が見えていれば、我われは通常、その机は実在していると思う。しかし、そう思うとき我われは、その机に関して、どのように考えているのであろうか。まず言えることは、我われはたいてい、その机の知覚像だけが存在している、とは考えていない。机が見えている限り、机の知覚像が存在することはたしかである。しかし、机が実在すると思っているときには、我われは、「その机の知覚像の背後に、分子、原子、もっと細かく、陽子や中性子、あるいはさらに細かく、素粒子といったミクロレベルの物理的要素が存在し、それが机を構成している」と思っているのではないか。さらに、「それらの要素は、我われの心とは独立に、言わば心の外に存在しており、それらがなんらかの仕方では我われの心に作用して机の知覚像が形成されている(たとえば、それらの要素からなる机に光が反射し、その光が我われの目の網膜を刺激し、その刺激が電気信号となり神経を伝わって脳に達し、脳がその信号を処理し、その結果、我われの心に机の知覚像が結ばれている)。」と思っているのではないか。

このような考え方にしたとせば、「Xは実在する」ということは、「Xの知覚像の背後に、心とは独立の要素が存在し、それらがXを構成している」ということになる。ところで、よく考えると、

このような意味での実在性は、経験機械の世界の中に現れる物事にもそなわっているように思われる。私が経験機械の世界の中にいて、私の目の前に机が見えるとしよう。その机は、単なる知覚像ではない。というのは、その知覚像の背後には、経験機械から送られてくる電気信号が存在するからである。ちょうど、現実世界ではミクロレベルの物理的要素が机を構成するように、経験機械の世界では電気信号が机を構成するのである。さらに、その電気信号は、私の心とは独立に存在している。そして、その信号が私の心に作用して、机の知覚像が形成されている。このように考えると、「経験機械の世界で経験するさまざまな物事は、現実世界の物事と同じような仕方を実在している」と言えるのではないか³⁾。

これに対して、次のような反論が出されるかもしれない。現実世界の物事を構成している要素は、素粒子というミクロレベルの物理的要素であるが、一方、経験機械の世界の物事を構成している要素は、電気信号である。この構成要素の違いが重要となる。というのは、素粒子は確かに実在するが、電気信号はしよせん信号という情報単位であり、そのような情報単位は実在するとは言えないからである。したがって、現実世界の物事は実在するが、経験機械の世界の物事は実在しない。あるいは、電気信号のような情報単位も、ある意味で実在すると言えるかもしれないが、ミクロレベルの物理的要素のような確固たる実体ではないので、その実在性は希薄で頼りないものである。したがって、経験機械の世界の物事もある意味で実在すると言えるかもしれないが、その実在性は、現実世界の物事のように確固たるものではなく、希薄で頼りないものである。だから、経験機械の世界の物事は、現実世界の物事と同じ意味で（あるいは同じ程度に）実在している、とは言えない。

この反論は、もっともらしく聞こえるかもしれないが、よく考えると、あまり説得力がない。というのは、どうして「ミクロレベルの物理的要素は実在するが、電気信号は実在しない」と言えるのか、あるいは、どうして「ミクロレベルの物理的要素の実在性の方が、電気信号の実在性よりも確固たるものである」と言えるのか、「実在性が確固たるものである」とは何を意味しているのか、といったことが不明だからである。そして、そもそも、ここで言われている「実在性」とはどのような意味での実在性なのかが、明らかではない。「ミクロレベルの物理的要素は実在するが、電気信号は実在しない」と言えるような「実在性」とは、あるいは、「ミクロレベルの物理的要素の実在性の方が、電気信号の実在性よりも確固たるものである」と言えるような「実在性」とは、どのような意味の実在性なのであろうか。

さらに、この反論は、次のようなことを考えると、ますます説得力を失う。我われは現在、現実世界の物事は、究極的には素粒子というミクロレベルの物理的要素から構成されている、と思っている。だが、素粒子の背後には、さらにそれらを構成する要素があって、そのような構成要素をたどっていくと、やがては、物質というよりは一種の信号（情報単位）に行き当たる、という可能性は否定できない。昔は、現実世界の物事はマクロレベルでしか捉えることができなかった。しかし、近代になって、それらの物事は、分子によって構成されていることが分かった。さらに、その

分子は原子によって構成され、原子は電子と原子核からなり、原子核は陽子と中性子から成るということが分かり、今では陽子や中性子は素粒子からできていると考えられている。このように、科学の発展によって、現実世界の物事のより基本的な構成要素が解明されてきた。ところで、今よりも科学が発展すると、やがて、素粒子を構成するもっと基本的な要素が解明され、さらに、その要素を構成するもっと基本的な要素が発見され、という具合に、科学によって物質の根本的な構成要素の解明が進み、ついには、物質の根本的な構成要素は、実は物質と言えるようなものではなく、一種の信号のようなものである、ということが発見されるかもしれない。さて、もしそのようなことが発見されたら、そのときに我われは、「現実世界は、実は、実在していなかった」と思うであろうか。そうは思わない、と私には思われる。そのときでも我われは依然として、目の前の机は実際に存在していると思うであろうし、窓から見える木々は現にそこにある、と思うであろう。つまり、現実世界の物事の根本的な構成要素が信号であることがわかって、その信号が我われの心とは独立に存在するならば、現実世界の物事の実在性は失われることはない、と我われは思うのではない。この意味での「実在性」からすれば、経験機械の世界の物事を構成している要素が電気信号であるからといって、それらの物事は実在していない、と結論づけるのは理にかなわない。

このように見ると、「現実世界の物事はミクロレベルの物理的要素によって構成されているが、一方、経験機械の世界の物事は電気信号によって構成されている」という相違があるからといって、「両者が実在性の点で異なる」とは言えないように思われてくる。

以上述べてきたことを考えると、前節で示した(1)、すなわち、「経験機械の世界は、実在ではなく幻影である」という見解は、はなはだ疑わしくなる。したがって、(1)を根拠にして「経験機械の世界での生涯よりも現実世界での生涯の方が良い」と言うのは難しくなる。では、(2)、すなわち、「経験機械の世界では、他者との接触がなく、孤独である」という見解はどうであろうか。

3. 孤独

(2)で言われていること、すなわち、「経験機械の世界では、他者との接触がなく、孤独である」ということは、正しいのであろうか。もし、(2)で言われている「他者」が、「現実世界にいる他者」を意味しているとすれば、(2)は正しいであろう。というのは、たしかに、経験機械の世界では、現実世界の人々と接触することができないからである。経験機械の世界でも我われは、ある意味で、他者と出会い、交流をもつことができる。たとえば、私は、経験機械の世界で、自分の妻とそっくりの人物に出会うことができる。その人物は、姿や形はもちろん、しぐさや振る舞い、話し方から話す内容まで、現実世界の妻とまったく同じである。そしてそれは、どこから見ても、現実の妻と同じように、知性や感情をもち、豊かな心をそなえているように見える⁴⁾。このように、経験機械の世界の中で私は、現実世界の妻とそっくりの人物に出会うことができる。しかし、その

人物は、コンピュータが作りあげたのであり、現実世界の妻ではない。経験機械につながれているかぎり、私は現実世界の妻と出会うことはできない。この意味では、(2)で言われていることは正しい。

しかし、この意味での孤独は、経験機械を改良することで、解消される。たとえば、自分ひとりでなく、他の人々も経験機械につながれて、その経験機械が生み出す世界の中でお互いが接触し交流し合うようなシステムをつくれればよい。映画『マトリックス』には「マトリックス」と呼ばれる巨大な機械が登場するが、それはまさしく、このような経験機械である。その映画では、人々は、生まれたときから、それぞれにあてがわれた容器の中で裸のまま溶液に浸されており、その脳には電極が差し込まれ、その電極を通じて巨大なコンピュータから電気信号が送られ、それによって、さまざまな経験をする。人々は、このことを知らない。マトリックスがノージックの経験機械と異なるのは、多くの人々がそれにつながれており、それらの人々の経験が互いにシンクロナイズされている点にある。たとえば、私がある人に「おはよう」と言う経験をすれば、その人は私から「おはよう」と言われる経験をする。私がある人を殴る経験をすれば、その人は私に殴られる経験をする。私とその人が、ともに同じ都市に住んでいるという経験をすれば、それと辻褃の合うような仕方で、それぞれの経験が構成される。マトリックスにつながれている人々は、(現実世界ではそれぞれが隔離されているが)、マトリックスが作りあげた世界を共有し、その世界の中で、マトリックスが作りあげた身体を通じて、出会い、語り合い、触れ合いながら、さまざまな関係を結んでいく。それはちょうど、我われが、現実世界を共有し、その世界の中で、出会い、語り合い、触れ合いながら、さまざまな関係を結んでいくのと同じである。

マトリックスのような経験機械であれば、それにつながれていても、それが供給する世界を媒介にして、現実世界にいる他者(すなわち、裸で容器の中に閉じ込められている他者)と接触し交流することができる。その意味で、マトリックスにつながれている人々は孤独ではない。これに対して、ノージックの経験機械につながれている人は、現実世界の人々との接触は断たれている。その意味で、その人は孤独である。

しかし、ノージックの経験機械の世界では、経験機械が作りあげた他者には出会うことができるのである。したがって、ノージックの経験機械につながれている人も完全には孤独ではない、と言えるのではないか。

これに対して、次のように反論されるかもしれない。現実世界にいる人々は、内面をもっている。たとえば私の目の前には、私の視点から眺められた世界が広がっている。すぐ目の前にキーボードがあり、その向こうにコンピュータの画面があり、さらに、その向こうには窓があり、窓の向こうでは隣家の植え込みが風でなびいている。また同時に、私の心には、次に書こうとしている文が浮かび、さらに、「今日の昼には何を食べようか」という思いがよぎる。このような眺めや思いは、今ここでこうしている私だけが取得できるのであって、それらにアクセスするためには、今

ここでこうしている私になるしかない。その意味で、このような眺めや思いは、私の内面を構成している。現実世界にいる人々は、これと同じような内面をもっている。しかし、ノージックの経験機械の世界に登場する他者は、しょせんコンピュータが作りあげた幻であるから、このような内面をもってははいない。この相違が重要である。内面のない他者と共にいても、実質的には孤独である。孤独でないためには、内面をもった他者がそばにすることが必要である。あるいは、内面のないものは、「他者」ではない。だから、ノージックの経験機械の世界では、実質的には、他者と出会うことはない。したがって、その世界は、やはり孤独な世界なのである。

この反論に対しては、次のような疑問が湧いてくる。ノージックの経験機械の世界で出会う人々は、本当に内面をもっていないのであろうか。我われは、現実世界で出会う人々には、自分と同じように、内面があると思っている。そう思うのは、おそらく、それらの人々が、自分と同じように、内面があるように振る舞い話すからであろう。これと同じように、ノージックの経験機械の世界で出会う人々も、内面があるように振る舞い話すのである。たとえば、私がそこで出会う妻とそっくりの人物は、現実世界の妻とまったく同じように、豊かな内面があるように振る舞い話すのである。したがって、現実世界で出会う人々に内面があると考えることが理不尽でないのであれば、ノージックの経験機械の世界で出会う人々にも内面があると考えことも理不尽ではないのではないか。

これに対して、次のような反論が出るかもしれない。ノージックの経験機械の世界で出会う人々は、しょせんは電気信号によって構成されており、いわば、電気信号の集合にすぎないから、内面をもつはずがない。

この反論に対しては、次のような応えが浮かんでくる。現実世界で出会う人々も、しょせんは素粒子から構成されており、いわば、そのような物理的要素の集合にすぎない。そのような集合が内面をもっているのであれば、電気信号の集合が内面をもっている、さほど不思議ではない。だから、「現実世界で出会う人々に内面があるなら、経験機械の世界で出会う人々にだって内面がある」と言っても差し支えないのではないか。一方が電気信号で構成され、他方がマイクロレベルの物理的要素によって構成されている、という違いが、内面の有無を左右するとは思われないし、たとえば、左右するとしても、どうしてなのかは明確ではない。

以上のことから、「現実世界で我われが孤独でないのであれば、経験機械の世界でも孤独ではない」と言えるのではないか。そうだとすれば、(2)を根拠にして「経験機械の中の生涯よりも現実世界の生涯の方が良い」と言うことは、さほど説得力をもたないことになる。

4. 別れ

これまでは、生まれてから死ぬまで経験機械につながれて過ごし、本人はそのことを知らないケ

ースを考えてきた。その考察からすると、「そのようなケースでは、経験機械が望みどおりの人生（の経験）を与えてくれるのであれば、経験機械につながれ生涯を送ることは、本人にとってさほど悪いことではなく、むしろ良いことである」と言えそうである。少なくとも、そのように言うてはならない積極的な理由はないように思える。

では次に、人生のなかばで経験機械につながれるケース、すなわち、人生のなかばで現実世界から経験機械の世界に移住するケースを考えてみよう。もちろん、このケースは、本人が経験機械につながれていることを知っている場合と、そうでない場合に分けることができるが、ここでは、どちらかに限定せずに、話しを進めたい。さて、このように、人生のなかばで経験機械につながれて、その後の半生を経験機械の世界で過ごすことは、本人にとって良いことなのであろうか。このような後半生は、本人にとって良い後半生なのであろうか。

このような後半生には、生涯を通して経験機械につながれている人生にはない問題がある。それは、別れである。たとえば、私が現実世界で妻としばらく暮らして、それから、あるときに経験機械につながれ、その後は経験機械の世界で暮らすとすれば、私は現実世界の妻とは会えなくなる。もちろん、その経験機械がマトリックスであって、私ばかりでなく、妻もそれにつながれば、私はマトリックスの世界で現実世界の妻に会うことができる。しかし、ノージックの経験機械に私ひとりがつながれるとすれば、現実世界の妻と別れなければならない。

もし、人生のなかばで経験機械につながれることを躊躇わせるものがあるとすれば、このような別れであらう。もちろん、現実世界で出会った人や物に執着がなければ、このような別れも悪いことではない。それは、自分の故郷を捨てて、あるいは、自分を取り巻く人間関係を断ち切って、見知らぬ異国に移住するようなものである。しかし、我われはたいてい、現実世界で生きているうちに、特定の人や物と強い結びつきを築きあげ、そのけっか、その人や物が自分にとってかけがえのないものになっていることがある。そのような人や物と別れることは、辛いばかりでなく、人生における重大な損失でもあるように思われる。もちろん、コンピュータのプログラムしだいで、そのような人や物とそっくりの人や物を経験機械の世界に出現させることは可能である。しかし、経験機械の世界に現れたそれらの人や物は、現実世界で自分が強く結びついていた人や物とは別人であり別物である。このように、人生のなかばで経験機械の世界に移住することには、かけがえのない人や物との別れがともなう。

このような別れを理由に、人生のなかばで経験機械につながれることを拒むことは、それになり理にかなっているように思われる。いままで慣れ親しんできた大事な人や物と別れて暮らす後半生は、あまり良い後半生ではないと言えるかもしれない。それは、親しい友人や愛する家族から離れて、見知らぬ異郷で後半生を送るようなものである。もちろん、故郷に何の未練もなければ、異郷で暮らすことは悪いことではない。しかし、別れるには忍びない人や物を故郷に残すとすれば、異郷に移ることは、自分にとって大事なものの喪失を意味する。

5. 幸福

「幸福な人生」と言うときの「幸福」を他の言葉で言い換えるとすれば、どのようにしたらよいであろうか。私は、端的に「本人にとって良い」と言い換えればよいと思う。つまり、「幸福な人生」とは、「本人にとって良い人生」なのである。だが、「本人にとって」とは、どのような事態なのか。また、その場合の「良い」とはどういう意味なのか、ということが問題になる。私は、これらの問題にどうにかして答えなければならないと思ってはいるが、良い答えがなかなか見つからない。

これらの問題が片付いたとしても、さらに、どのような人生が「本人にとって良い人生」すなわち「幸福な人生」なのか、という問題が残る。この問題にも、答えなければならないと思っているが、こちらも良い答えがなかなか見つからない。ただ、上で行った考察が、ひとつの手がかりを与えてくれるような気もする。

「人生が幸福になる（本人にとって良い人生になる）ためには、快適な経験（心的な状態）が必要であり、また、快適な経験さえあれば、それだけで人生は幸福になる」という考え方がある。この考え方は（幸福に関する）「快楽主義 hedonism」と呼ばれ、西洋の倫理学の中でひとつの大きな潮流をなしている。たとえば、18世紀から19世紀に生きたイギリスの哲学者ベンサム Jeremy Bentham などは、快楽主義を唱えている。この考え方にしたがえば、経験機械が快適な経験を与えてくれるならば、経験機械につながれて生涯を送ることは、本人にとって良い人生になる。一方、快楽主義に反対する人々は、「ある人が快適な経験を得たとしても、それだけで、その人の人生が幸福な人生（その人にとって良い人生）になるわけではない」と主張する。この主張によれば、経験機械の世界でいくら快適な人生を過ごすことができて、その人生には何かが欠けている。だが、何が欠けているのであろうか。たとえば、反快楽主義の現代の代表者であるノージックは、欠けているものとして、「実在との接触 contact with reality」を挙げている（Nozick 1974: 45）。経験機械の世界で出会う人や物、あるいは、経験機械の世界でなされる行為は実在していないか、さもなくば、その実在性が希薄である、というわけである。そして、だから、人生において快適な経験を享受する（快適な心的状態にある）だけでは、その人生が本人にとって良い人生にはならない、と彼は主張する。

しかし上で見たように、「経験機械の世界の物事は実在しない」とか「経験機械の世界の物事の実在性は希薄である」といった主張には大いに議論の余地がある。また、人の実在性に関して言えば、それが内面をもっていることを含むとしても、「経験機械の世界で出会う人々は実在していない」とは言い切れない。だから、「快適な経験だけでは実在性が欠けている」という理由で快楽主義を批判するのは、うまくいかないように思われる。

だからといって、快樂主義が正しいとも思われない。快樂主義が正しいとすれば、人生のなかばで経験機械の世界に移住し、そこで以前にまして快適に過ごすことができれば、そのような後半生は、本人にとって良い後半生になる。しかし、必ずしもそうは言えないように思う。それは、上で指摘したように、その移住には別れがともなうからである。私が人生のなかばで経験機械の世界に移り住むことによって、以前にもまして快適な生活を送ることができるでしょう。たとえば、快適な環境のなかで楽しく仕事をこなし、家庭はいつも円満で、友人や同僚との人間関係も円滑に進み、深刻な悩みもストレスもない、といった生活を送ることができるでしょう。そうだとすると私は、その世界に移り住むことを選ばないであろう。それは、私がこの現実世界の人や物との間に親密な関係を築き上げてきたからであり、経験機械の世界に移住したら、その関係を断たなければならないからである。このような関係は、個別的であり、再現のきかないものである。たとえ、経験機械の中で私が、現実世界の家族や友人とそっくりの人々に出会い、そこで現実世界と同じような関係を彼らと結んだとしても、彼らは現実世界の家族や友人とは別人である。したがって、そこでは、私が現実世界の家族と友人との間に結んでいた関係そのものを得ることはできない。

私が現実世界の中で特定の人や物との間に築き上げてきた、このような関係は、私の人生が（私にとって）もつ価値を構成する（つまり、私の幸福を構成する）主要な要素になっているように思う。もちろん、快適な経験もそのような価値の構成要素のひとつであろう。しかし、人や物との間に親密で個別的な関係をもつことも、人生の（自分にとっての）価値を構成する重要な要素になるように思う。このことが、この紙面を借りて行った考察をとおして、私が気づいたことである。

しかしなぜ、人や物との親密で個別的な関係が、私の人生の（私にとっての）価値を構成する重要な要素になるのであろうか。それはおそらく、それらの関係が、私の視点からしか見て取れないような、個別的な価値をもつからであると思われるが、この点については、いまだに明らかにすることができないでいる。

注

- 1) 私がある友人に「毎晩、長時間ぐっすり眠り、昼寝もして、そのおかげで疲労がたまらずに長生きできる人は、うらやましい」と言ったら、彼は「寝ているときは死んでいるのも同然だから、睡眠時間が短くて疲労がたまり、そのために短命な人生と、睡眠時間が長くて疲労がたまらず、そのために長命な人生とでは、実質的な人生の長さは、たいして変わらない」と応えた。しかし、夢の中でもうひとつの人生を送ることができるのであれば（したがって、寝ているときは死んでいるのも同然ではないとすれば）話しはだいぶ違ってくる。
- 2) 「経験機械は故障しないのか」、「経験機械のメンテナンスは誰がするのか」、「溶液に浸された脳は生き続けることはできるのか」といった不安が躊躇を生み出すかもしれないが、こういった技術的な面に関する不安はまったくないことにしよう。すなわち、経験機械は故障の心配もないし、脳もそれなりに（少なくとも70年や80年は）生き続けることにしよう。

また、脳だけになって溶液に浸されるというグロテスクな姿に抵抗感をもつ人がいるかもしれない

が、そうであれば、通常の肉体をもったまま経験機械につながれることが可能であることにしよう。たとえば、映画『トータル・リコール』に出てくるように、金属性の帽子のようなものを頭に被るだけで、経験機械の世界に入ることができることにしよう。

さらに、経験機械は、外的世界の物事（自分の心の外に存在する物事）に関する知覚認識（たとえば、自分の前に机があって、その上にはコンピュータがあって、窓の外では風で木々がざわめいている、といった認識）だけでなく、その他の心的事象、たとえば、欲求や意志、感情や情念、価値判断や規範判断、といった心的事象をも供給するとすれば、自分を構成している心的事象のほとんどが外から与えられることになり、実質的には自分は自分でなくなってしまう、という不安があるかもしれない。そこで、ここでは、経験機械は、あくまで外的世界の知覚認識だけを供給し、その他の心的事象に関しては、経験機械は直接に関与しない、と想定することにしよう。

それから、経験機械の与える経験が映画のようなものであって、自分の意志や自分の身体の動き（の経験）に応じて変化しないとすれば、あまりに受動的である。そこで、経験機械が供給する経験は、自分の意志や身体の動き（の経験）に応じて適切に変化する、と想定することにしよう。たとえば、「右手を上げよう」と思ったら、それに連動して、右手が上がるという経験が経験機械から供給され、あるいは、「首を右にまげよう」と思ったら、首が右に曲がるという経験が与えられ、それに伴って、見える景色も変化する、といった具合になっていることにしよう。

3) この議論を組み立てるうえで、Chalmers 2005から多くを学んだ。

4) もちろん、コンピュータのプログラムを変えれば、現実の妻の知覚像と異なる妻の知覚像を出現させることは可能である。しかし、ここでは話を簡単にするために、現実の妻とまったく同じ知覚像が現れることにしよう。

ついでに言えば、経験機械のコンピュータのプログラムを操作すれば、経験機械の世界に現れるあらゆる物の知覚像を変えることができる。たとえば、慶應大学の校舎も、コンクリートの老朽化した校舎ではなく、蔦のからまる石造りの重厚な校舎に変えることができるし、私の風貌も、背が高くスラッとした二枚目の紳士に変えることができるのである。

参考文献

- Nozick, Robert. 1974. *Anarchy, State, and Utopia*, Harvard University Press. (嶋津格訳『アナーキー・国家・ユートピア』木鐸社, 1998)
- Chalmers, David. 2005. "The Matrix as Metaphysics," in *Philosophers Explore the Matrix*, Christopher Grau (ed.), Oxford University Press, 2005.